

大講堂 論義について

大講堂の内部では、2つの論義台が演台として機能します。ここでは僧侶が顔を合わせ議論と討論をするが、その声はお堂の高い天井によって増幅されます。法相宗は、瞑想などの他の仏教の実践よりも勉学を重視し、大講堂を薬師寺の本質的かつ代表的な場所にしてきた長い歴史があります。

論義されている論題の中には、初期インドの大乗仏教で栄えた仏教哲学と心理学の学派であるヨガチャラがあります。大乗仏教とは、今も残る仏教の2つの主要な宗派の1つです。東アジアのヨガチャラは、654年に道昭によって日本にもたらされました。道昭は、中国にて、インドの仏教を中国にもたらした創始者、玄奘のもとで学んだ日本の僧です。日本では、東アジアの「唯識」のヨガチャラの学派は「法相」として知られており、すべての現象は心の現象であるという考えは、法相宗の教えと討論において極めて重要な役割を果たします。毎年4月、これらの論争がかつてどのように行われたであろうかについての再現が、最勝会と呼ばれる仏教儀式で行われます。大講堂は、毎年11月に薬師寺の僧侶が受験する試験会場でもあります。僧侶は、数世紀前の言語で書かれた約2時間の説法を21日間かけて学習し、暗記しなければなりません。また、お堂には、お釈迦様の直接の10人の偉大な弟子の像が展示されております。10人は悟りを開き、これらの像は悟りを開き、これらの像は悟りを開くことの難しさを示しているが、忍耐力があれば、普通の人でもそこに着くことができることを示している。